

巻頭言



豊島 将文

日本医科大学付属病院女性診療科・産科

進行がん治療は、従来の画一的な化学療法から、個々の腫瘍が有する分子生物学的特性に基づく個別化医療 (Precision Medicine) へと劇的なパラダイムシフトを遂げました。この変革の中核を担うのが、治療薬の適応判定に不可欠なコンパニオン診断 (CDx) と、それに基づく分子標的治療です。本特集では、急速に複雑化するこの分野において、各領域の第一線で活躍される専門家の先生方に、最新の知見と実臨床における戦略をご執筆いただきました。

まず、ゲノム医療が先行する呼吸器領域について、宮永晃彦先生 (呼吸器内科) より、単一遺伝子検査からマルチ CDx, さらに包括的がんゲノムプロファイリング (CGP) へと進化する検査体制の中で、いかに戦略的に治療方針を決定すべきか概説いただきました。乳癌領域では、栗田智子先生 (乳腺科) に、従来のサブタイプ分類に加え、抗体薬物複合体 (ADC) の登場により高度化する治療シーケンスの最適化と、次世代診断の展望についてご解説いただきました。消化器癌領域については、山田岳史先生 (消化器外科) より、

大腸・食道・胃癌における個別化医療の現状に加え、治療抵抗性の要因となる腫瘍の「空間的・時間的不均一性」を克服する鍵として、リキッドバイオプシーや AI を用いた動的な診断戦略の可能性をご提示いただきました。また、私 (豊島) が担当する婦人科悪性腫瘍領域においては、卵巣癌における PARP 阻害薬や、子宮体癌・頸癌における免疫チェックポイント阻害薬導入による治療変革を、その根拠となった臨床試験を踏まえて解説いたしました。あわせて、CGP 検査の課題や遺伝カウンセリングの重要性、将来の臨床応用が期待される新規モダリティにも触れ、本領域における個別化医療の現状を報告させていただきました。

そして、これらの高度なゲノム解析を成功させるための基盤として、坂谷貴司先生 (東京慈恵会医科大学病理学講座) には、検体採取から固定に至るまでの適切な検体処理 (Pre-analytical phase) の重要性について、病理専門医の立場から極めて実践的な解説をいただきました。

本特集が、急速に進化するコンパニオン診断と分子標的治療の理解を深め、進行がん患者さんに最適な医療を届けるための一助となれば望外の喜びです。